

SECRET 7 LINE

「やっぱり3ピースってバンドの最小単位じゃないですか。それでや



[L-R]
G./Vo.RYO
Ba./Vo.SHINJI
Dr./Vo.TAKESHI

西海岸系のサウンドを起点としながらも、キャッチーなメロディと抜群のポップネスで一聴必殺のキラーチューンを生み出すSECRET 7 LINE。メンバー全員が作曲するという、バンドとして類い希なる才能を持つ彼らが、10/22に待望の1stフルアルバム『How many lines does she hide?』をリリースした。同作は一切捨て曲無し、メロディックという枠組みに収まりきらないライティングアプローチとアレンジセンスは、今後のシーンで注目すべき存在になることを予感させる。

● RYO くん と SHINJI くん はそれまでバンド経験がありながら、2007年7月に大阪から上京してきてSECRET 7 LINE を結成したんですね。それまでも前のバンドで長く大阪で活動しながら、なぜ上京したんでしょうか？

SHINJI: 僕らもそろそろええ年なので、“やるならとことんやろう”と。前のバンドはRYOと僕ともう1人でやっていたんですけど、ちょうどドラムが抜けたということもあって。

●大阪ではどれくらいやってたんですか？

RYO: 6~7年やってましたね。今から思えば中途半端にやっていたんです。

●大阪で積み上げたモノを失う怖さはなかったんですか？

SHINJI: 無かったですね。“やるしかない”としか思っただけなんです。

● “やるならとことんやろう”ということですが、具体的に2人はどういうところを目標にしているんですか？

RYO: 現実的な話として、音楽で飯を食っていけるような形になりたいっていうか。Make my lifeですね。

● Make my lifeって…。

RYO: 僕の場合は趣味でバンドをやりはじめて、

やっていくうちにどんどん本気度が高くなっていったんですけど、単純に“音楽で飯を食っていく”状況というのは、それだけCDを買ってくれる人が居て、ライブに足を運んでくれる人がたくさん居るからこそ成り立つことですよね。

●はい、そうですね。
RYO: だから、“音楽で飯を食っている”というのは、自分たちの音楽がたくさんの人たちに認められた結果のひとつだと思えます。そういう意味で、“音楽で飯を食っていく”ということを目指して、もちろん人それぞれ、バンドそれぞれの考え方があっていいと思います。

●例えば彼女のお父さんに「何の仕事してるんだね？」と訊かれたときに「音楽で生活してます」と胸を張って言いたいです。

RYO: そうですね、はい。

●否定しないんだ(笑)。

RYO: いや、でもそういうことですよ(笑)。オナニーは大好きなんですけど、音楽としてはオナニーで終わりがたくないっていう。

●ちょっと上手いこと言った(笑)。
SHINJI: 僕の場合、前のバンドにいちばん後から入ったんですよ。それまでもバンドをやっていたんですけど解散して、その時にもう音楽を辞めて普通に

就職しようと思ったんです。

●あ、そうなんですか。

SHINJI: 24~25歳の頃だったんですけど、それで求人雑誌を見たリハローワークに行って色々仕事を探してたんですけど、“なんか違うな”と。そこで、やりたいことが自分には音楽しかないっていうことに気づいたんですよ。

●はい。

SHINJI: ちょうどその頃にRYOから誘われてて断ってんですけど、もう1度考え直して“やっぱりバンドしかないな”と。色々おもしろそうなお仕事もあったんですけど、自分が人生を賭けることが出来るモノではないかなって。だから目標というよりも、その気持ちがか今もいちばん強いから音楽をやっているっていうか。

●なるほど。上京後、ドラムのメンバーチェンジがあってTAKESHIくんが加入し、今のメンバーが揃ったのが今年の5月ですね。そして10/22に1stフルアルバム『How many lines does she hide?』がリリースとなりましたが、今作はどうやって作り上げていったんですか？

SHINJI: 最初は特に全体的なイメージとか考えてなくて、単純にライブのために曲を書いてデモを作っていくという繰り返しでした。もちろんアルバムをリリースすることが決まってるから書いた曲もあるんですけど。

RYO: だからアルバムとして出していきたいテーマとかは特になかったんですけど、それ以前に、デモを作っていく段階からバンドして打ち出ししていたところは一貫してありました。

●というところ？

RYO: 勢いがあるって、ポップでキャッチーなサウンドというか、そこはすべて一貫させたいと思って

高いクオリティを誇る楽曲は多くの人の胸に突き刺さる 抜群のセンスを誇る3人が放つ待望の1stフルアルバム

っていくと、自然とそういう考え方に辿り着いた感じはありますね」

ます。
●今作は全体的なイメージとして、センスがいいなと思ったんです。西海岸系のサウンドは疾走感やライブ感がポイントだったりしますが、“ライブを演る気持ちよさ”がそのまま楽曲に出る恐れもあると思うんですよ。ではなくて、SECRET 7 LINEから感じるのは“ライブで聴く気持ちよさ”の視点を感ずるんですよ。

RYO: ああ〜。

●そういう意味で捨て曲が無いし、曲によってキャッチーさのポイントも違うんですけど、共通して感じたのは口ずさめる感じというか、SECRET 7 LINEは3人全員が曲を書くんですよね？

RYO: そうです。今作はTAKESHIが1曲 (M-9 [A View inside My Eyes]) で、僕が5曲 (M-1,2,10,12)、SHINJIが6曲 (M-3,4,5,6,7,8)、それとカヴァーが1曲 (M-11 [I'll Be There for You] / The Rembrandts) ですね。

SHINJI: と言っても、「The Road to Innocent」(M-6) は曲というか、イントロなんですけど(笑)。

●聴いたらすぐわかりました。「The Road to Innocent」を聴いたらいつの間にか「Reason」(M-7) にトラックが変わって、あれ？ と。

SHINJI: フェイントです(笑)。

●イントロみたいだと思ったんですけど、この曲は何ですか？

SHINJI: これはですね、ぶっちゃけてしまうと「Reason」のイントロなんです。

●え？

RYO: もともと、まずイントロがなくて歌とギターから始まる「Reason」が出来たんです。で、その後にイントロを付けたんですよ。ライブとかだったらイントロがあった方がいいんじゃないかと思って。でも一方で、歌とギターからガッと始まるのもインパクトがあっていいかなという意見もあった。

●ああ、なるほど。どっちもいいんじゃないかと。

RYO: じゃあイントロだけ別のトラックにしたらいんじゃないかと、それが「The Road to Innocent」なんです。そうするとですね、どっちの選択も出来るんですよ。イントロで始まるパターンと、歌とギターだけでガッと始まるパターン…この2つの楽しみ方が出来るんですよ。

SHINJI: やっぱりCDとライブは別にしたくなかったですよ。そういう部分もあります。

●発想がすごい(笑)。シャッフルで聴いたらどうしようもないし。

RYO: ああ〜、それはどうしようもない。

SHINJI: マズいですね。

●(笑)。ところで、曲はどうやって作り上げていくんですか？

RYO: 歌とコードは作者が持ってきて、リズムパターンとかを大まかに伝えて、バンドで合わせるっていう感じですね。もちろん細かいところは最初のイメージから変えることもありますけど。

SHINJI: でもコードも変えることあるよ。

RYO: あ、そうか。

●ということは歌が最初なんですね。メロディック系ではちょっと珍しいかも。

RYO: 僕らはそれが当たり前なんです。基本的には歌モノだと思っている。メロディと歌を大事

にしたくて、そこがいちばん妥協してないポイントだし。

●だから“聴く気持ちよさ”を感じたのか。最初に歌が出てくるのは、どういう感じなんですか？

RYO: 僕の場合はメロディからですね。鼻歌っていうか。歌詞に関しては後から作ることが多いかな。SHINJI: 僕も鼻歌でメロディから出てくることが多いんですけど、そこに英詞を乗せながら作っていくと、パチッと当てはまるイメージが出てくることがあるんですよ。そうすると曲が完成する感じですよ。

●イメージ？

SHINJI: そこまで自分が過去に見た情景であったり経験であったり、もしくはその時の気分だったり曲のイメージにハマるっていうか。そうすると曲の全体像が見えるんですよ。

●それぞれが曲を作るということは、楽曲のイメージが最初に固定される恐れはないんでしょうか？

RYO: いや、それは意外すりなりと。

SHINJI: たぶん、全員が曲を作るということもあって、全員が曲に対する理解が早いんですね。だからドラムのTAKESHIも「こういう感じ」と言ったら、とりあえず自分なりにはいけるんですよ。もちろん完成形じゃないにしても、そこから作曲家とやりとりをしていくっていいかなって思うんですよ。

●確かに3人とも作曲家というのは大きいですね。SECRET 7 LINEの武器っていうか。

RYO: あとアレンジに関しては、やっぱり歌を活かしたいというところをいちばん重視しているんで、楽器アレンジはどうしてもシンプルになってしま

っちゃうんですけど、でもそっちの方が楽曲全体が活きているっていう。メンバー全員がもともとそういう意識を持ってますね。

●なるほど。

RYO: やっぱり3ピースってバンドの最小単位じゃないですか。それでやっていくと、自然とそういう考え方に辿り着いた感じはありますね。

●今作を最初から聴いていくと、後半にいよいよバラエティが出てくると思うんです。さっき話に繋がった「The Road to Innocent」を過ぎたアルバム中盤あたりから、楽曲の振り幅が広がるっていうか。

SHINJI: どうしても同じような曲ばかりにはたくなっているのが根本にはあるんですよ。でも、振り幅が広がって何がやりたいかわからなくていう感じになってバンドとしてどうかと思うし。だから、(振り幅を) 考えつつ考えてないっていう感じですね。ちょっと説明が難しいんですけど。

●ジャンルのなごだわりがないかなと思ったんですか？

SHINJI: そうですね。ないです。でもイメージとして、勢いがあるってライブで映えるような曲を押し出していきたいっていう意図がある。

RYO: だからアルバムの前半は勢いのある曲が並んでいるんです。

●そこはアルバムの芯の部分ですよね。そんな中、「Daylight」(M-12) はコーラスにエフェクトがかかっているじゃないですか。

RYO: そうですね。ロポットボイス的な。

●なんか珍しいっていうか、新鮮だったんですよ。

なぜあんなエフェクトを？
SHINJI: あれはエンジニアさんのアイデアなんですよ。その方は色々考えてくれるんですけど、アルバムを通して同じようなエフェクトは絶対に1回しか使わないっていう考えを持っている人で。

●そうなんですか？

SHINJI: そんな中で「こんな感じでどう？」って提案してくれて「ああ、いいっすね」って。

RYO: 「こんな感じでどう？」っていうか、むしろ「これでいいよ」っていうくらい勢いで(笑)。

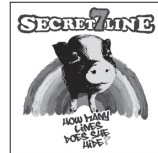
●アハハ(笑)。ちょっとしたアクセントになっていておもしろいと思いました。あのエフェクトは決して楽曲のメインになっているわけではなくて、ライブでも再現出来るわけではないんですけど、音源ならではの遊び心がいいた。

RYO: なるほど。じゃあ誌面では、僕が考えたという感じにしたいってしてもらいましょうか。

●わかりました。

interview : Takeshi.Yamanaka

1st Full Album 『How many lines does she hide?』



Kick Rock MUSIC
EKRM-1100
¥1,995 (税込)
NOW ON SALE

LIVE SCHEDULE

- 11/01 (土) 渋谷GIG-ANTIC
- 11/02 (日) 伊勢Question
- 11/03 (月・祝) 名古屋ROCK'N' ROLL
- 11/07 (金) 熊谷BLUE FOREST
- 11/08 (土) 宇都宮HELLO DOLLY
- 11/09 (日) 磐田FM-STAGE
- 11/14 (金) 岡山PEPPERLAND
- 11/15 (土) 福岡EARLY BELIEVERS
- 11/16 (日) 広島Cave Be
- 11/21 (金) 神戸KINGS CROSS
- 11/22 (土) 心斎橋新神楽
- 11/24 (月・祝) 渋谷GIG-ANTIC
- 11/29 (土) 柏ALIVE
- 12/05 (金) 横浜CLUB 24WEST
- 12/06 (土) 仙台MACANA
- 12/07 (日) 新宿ACB HALL
- 12/14 (日) 沼津WAVE
- 12/20 (土) 池袋MANHOLE
- 12/21 (日) 奈良NEVER LAND
- 12/25 (木) 名古屋ROCK'N' ROLL
- 12/27 (土) 水戸LIGHT HOUSE
- 01/10 (土) 清水JAMJAMJAM
- 01/11 (日) 沼津WAVE
- 01/16 (金) 熊谷BLUE FOREST
- 01/17 (土) 川崎豊元STARGIC ROOM
- 01/24 (土) 京都MOJO
- 01/25 (日) 滋賀U★STONE
- 02/01 (日) 郡山#9
- 02/07 (土) 名古屋ZION
- 02/08 (日) 心斎橋新神楽
- 02/14 (土) 新宿ACB HALL

http://www.secret7line.com/